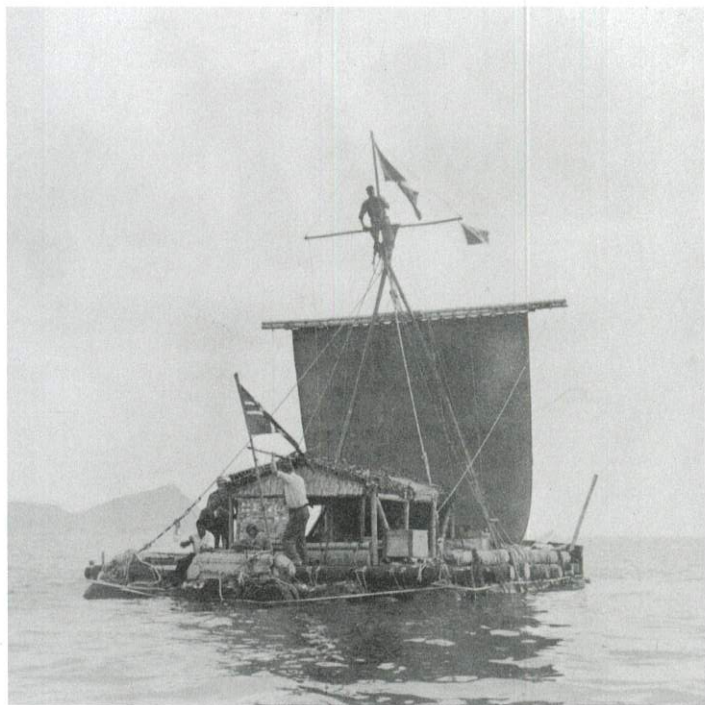


Japanese



コンティキ博物館 ガイド



- 35 まえがき
- 37 トール・ヘイエルダール
- 41 ファトゥ・ヒバ島
- 46 コンティキ号
- 58 ガラパゴス諸島
- 63 イースター島
- 68 ラー号、ラーII号
- 74 ティグリス
- 79 モルディブ
- 83 トウクメ
- 86 世界市民として
- 89 環境保護活動家として
- 90 芸術家として
- 93 語り継ぐ者として

コンティキ号博物館へ ようこそ

トール・ハイエルダール（1914年-2002年）は歴史上もっとも有名な探検家の一人です。彼の型破りな生き方と遠征の数々には今でも私たちの心を奮い立たせるものがあります。

1947年、彼はバルサ材のいかだ船コンティキ号で太平洋を横断しました。この探検航海は映像化され、のちに1951年にアカデミー賞長編ドキュメンタリー映画賞を受賞しました。その後、彼は葦（あし）船ラー号、ラーII号、およびティグリス号で同様の偉業を成し遂げ、これらの航海によって、彼は環境と世界平和への深い関心を表しました。彼はまた、ガラパゴス諸島、イースター島、およびトゥクメにおける重要な考古学的発掘調査においても功績を残しました。

コンティキ号博物館ではハイエルダールの世界的探検旅行の品々、最初のいかだ船コンティキ号、および葦船ラーII号が展示されております。

このご来館を期に皆様にもトール・ハイエルダールの科学への挑戦、世界探検への情熱と勇気を掴んで帰って頂けたらと願っております。

マーティン・ビーエル
コンティキ号博物館理事長



トール・ヘイエルダール

トール・ヘイエルダールは1914年10月6日にノルウェーのラルヴィック市で生まれ、同地で育ちました。父、トール（同名）は醸造所のオーナーでした。母、アリソンはラルヴィック地域博物館協会の会長であり、動物や自然科学への強い情熱を息子のトールに伝えました。使用されなくなった醸造所の建物を使い、動物学博物館を作ったこともあります。幼少期のトールは絵を描くことが得意で、若干8歳で太平洋諸島の様子などを想像豊かに描き上げていました。その頃にはすでに将来探検家になると決めていたと言われております。

青年期のトール・ヘイエルダールはクロスカントリースキー、森や山へのハイキングに興味を持ち、幾度となくノルウェー国内の山々へ赴き、自然を用いて生き延び、共存していく知恵を学びました。ロンダネ国立公園やヨーツンハイム山地の探検のために、友人のエリック・ハッセルベルグと共に長期間の野外生活、冬には雪洞でのキャンピングなどの経験もしました。探検旅行をするときは必ず愛犬のカザンを伴っていたと言われていいます。

彼の探検旅行の報告記事は雑誌「Tidens Tegn」（ティーデンス・タイン）、また年鑑などにおいて出版されました。記事にはトールが描いた図や撮影した写真が使われています。後には「イグルーの作り方」など教育目的の記事も書くようになり教師としての経験も積んでいくと同時に、各地のアウトドア愛好家にもその名が知られるようになっていきました。

1933年にはノルウェー国立オスロ大学（以下オスロ大学）に入学し生物学と地理学を学び始め、間もなく第一世界大戦中にポリネシアを探検したビャルネ・クレペリン氏と知り合う機会を得たトール・ヘイエダール。クレペリン氏はタヒチ島の領主タレイエロ氏の娘テウイマタ女史と婚約をしていましたが、1918年のタヒチ島のスペインインフルエンザの大流行で島の人口半減と共に彼女はこの世を去ってしまいました。クレペリン氏は亡くなった婚約相手テウイマタ女史を記念して有名な図書集「ポリネシア・コレクション」をオスロ大学に遺贈しました。





ファトゥ・ヒバ島 (1937年)

1933年、ヘイエルダールは2才年下のリーブ・コケロン・トルプと恋に落ち、森や自然の中で恋人との時間を過ごしていました。ヘイエルダールは西洋の文明から離れ自然と共存する原始的な生き方を求めており、現代でもそのような生活、文化を保つ太平洋諸島と一緒にいかないかとリーブを誘ったのでした。リーブはヘイエルダールの考えに賛同し、二人はフランス領ポリネシア内のマルキーズ諸島の一島、ファトゥ・ヒバ島に赴くことを決断したのでした。

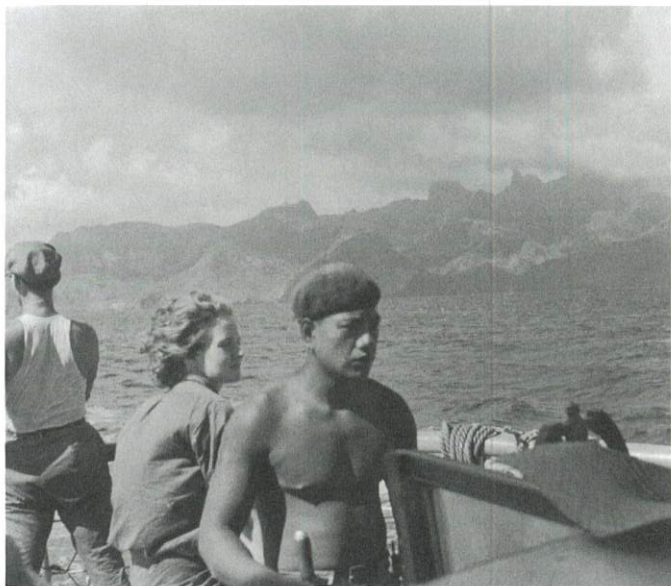
1936年、クリスマスの日には2人は結婚し、次の日にはファトゥ・ヒバ島へと旅立ちました。当時ヘイエルダールは22歳、リーブは20歳でした。旅の途中にタヒチ島に寄り、領主タレイエロ氏からの様々なアドバイスを受け、若い2人は旅を続けていきました。

まるでおとぎ話のような2人のファトゥ・ヒバ島での暮らしですが、トールの日常生活はカタツムリや昆虫を集めることに追われていました。それはオスロ大学教授クリスティーネ・ボネビーとの約束で動物学研究室で今後博士号を得るための論文の研究に使うものを集めていたのです。

いつしかハイエルダールとリーブはファトゥ・ヒバ島の住民たちの先祖は一体どこから来て、どの様にこの島に移り住んだのかについて興味を持ち始めました。当時の人類学の学説はポリネシア全体が東アジアの民族により徐々に移入されたというものでした。ハイエルダールはファトゥ・ヒバ島、そして近隣諸島における観察を通して、先史時代から島に残る芸術品が、同時期の古代アメリカの物と似ているように感じ、当時の人類学の定説には何か欠けていると考えるようになりました。

ある日リーブはファトゥ・ヒバ島の東海岸には常に波が押し寄せていることに気づき、パズルをはめていくように2人は仮説を組み立てたのでした。それはコロンブス以前の世代に南アメリカの民族が風と海流の力を借りてポリネシアの島々に辿りついたのではないかというものでした。当時ポリネシアの専門家らは南アメリカの先住民族には太平洋を渡れるほどの船技術を持っていなかったと考えるのが一般的でした。しかしハイエルダールはそれに納得することができず、後に彼を有名にするこの新しい学説が生まれたのです。

ファトゥ・ヒバ島での生活は予想以上に過酷であり、食物不足や高温湿度の環境などを理由として1年後にハイエルダールとリーブはパラダイスの夢を諦めてノルウェーに帰国しました。



Div r skit
 Leser om
 Mot gubben.

White Shadows in the Southern Seas

EN HOLLIS HED AL SOM LEVER ALERE EN KULP

ATU OVA
 HVA OVA
 NORDVA
 TRIP VALLEY
 DET BRIS MER I ALT

TEMPERATUREN ER 65 GR
 ET IDELT KLIMA UTEN REANTID
 STADTE OG VAKRE MEHUSSEN
 GJESTEVENLIGE FOLK

MASSEVIS AV FUGL
 SKILPADDER
 KOLVAPALMER

KRABBER SOM GÅR I TRENE
 FOKULLETS HESTER OG KYE
 GÅSER, HØNER, KATTER OG HUND
 MASSEVIS AV VANNFALL
 BRØDFRUKTTREER
 DET VRIMLER AV FUGL
 POLYESTERNE VÅR KUDET
 PÅ PARER
 BLESKAPRUTER OG BOKTERBARK



EN HVIT KOLONI MED FRANSK
 GUYEN NTR
 EN KATOLSK KIRKE MED EN
 ET HOSPI TAL
 PARVERI KE FISK I LAGØNEN
 EN HERLIG KRYDDERKART OG LØFT
 TARORØTTER
 SOTTOTETER SOM VEIET OPTIL 25KG

ÆNE ER AV VULKANK OG HØI
 FJELL SOM SÅR RØD
 DE INNHØIETES RØD
 PÅLA SANGU KTORAL I LAGER DER





コンティキ号 (1947年)

1947年4月28日、6人の船員と1匹のオウムを乗せたバルサ材のいかだ船がペルーのカヤオ港からポリネシア諸島に到達することを目標に出発しました。船長は33歳のトール・ヘイエルダール。ポリネシア諸島のファトゥ・ヒバ島での生活以来、長い年月を費やしてきた学説「ポリネシアへの人類の移入は西からのみではなかったこと」そして「南アメリカの先住民族が海を渡って東からも移入したこと」を立証することが遠征の目的でした。いかだ船の名前の由来はインカ神話の最重要の神、文明の創造者コン・ティキ・ウイラコチャ。神話の中では大きないかだを使いペルーから日の沈む方角に向かって航海したと言われる神です。

1946年トール・ヘイエルダールがこの学説をアメリカの人類学者に提示したところ、真に受けしてもらえませんでした。人類学者の1人、ハーバート・スピンドン氏からの「それなら貴方がペルーからバルサ材のいかだ船で太平洋諸島まで渡ってみたらいいではないか。」との発言に、己への挑戦を感じたヘイエルダールは早速探検の計画を初めました。ヘイエルダールと人員を乗せたバルサ材のいかだ船でペルーから太平洋を横断する計画です。



1946年、ニューヨークのエクプローラーズ・
クラブを訪れるトール・ヘイエルダール





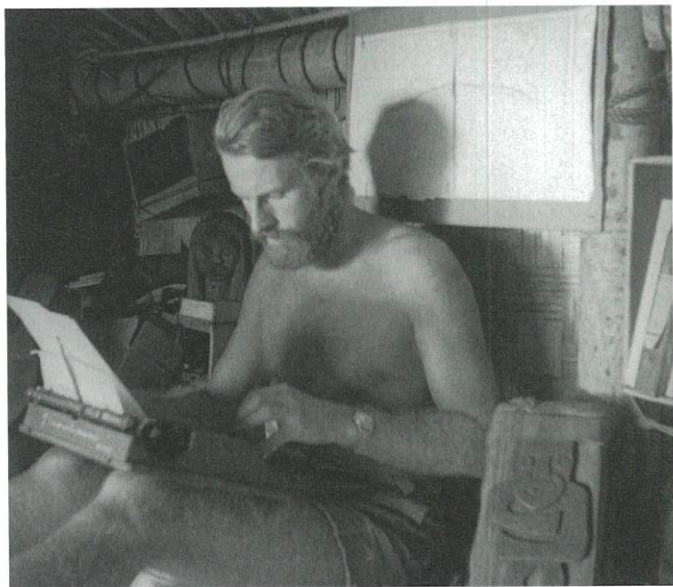
コンティキ号遠征の乗組員ら。左からクヌート・
ハウグランド氏、ベンクト・ダニエルソン氏、トール・
ヘイエルダール、エリック・ヘッセルベルグ氏、
トルステイン・ロビー氏、ヘルマン・ワッツィンゲル氏。

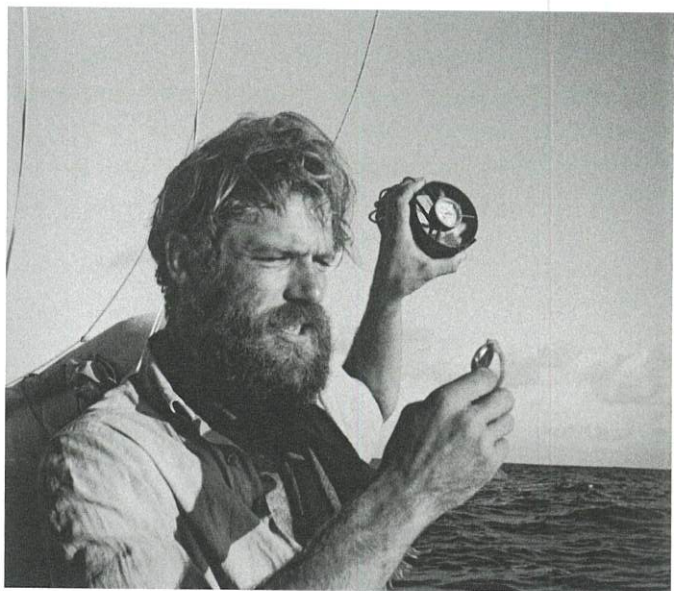
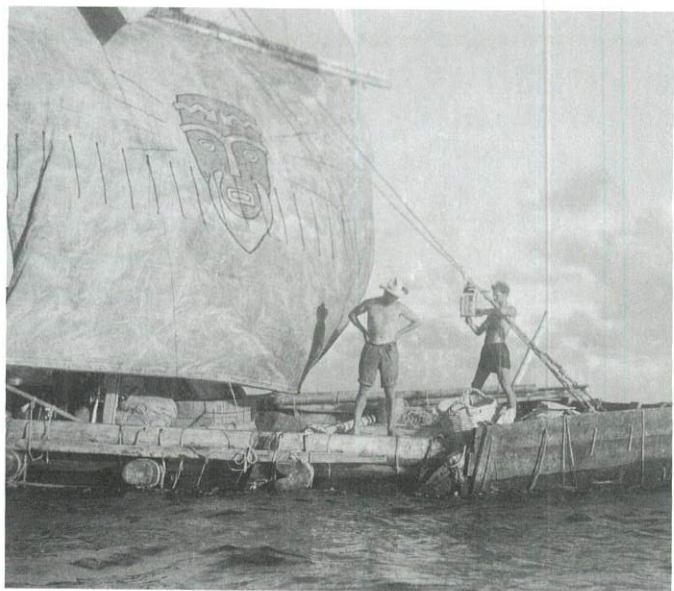
計画はまず乗組員を集めることから始まりました。参加の意志を示し、尚且つ適切なスキルを持っている5人の乗務員はすぐに集まり、ヘイエルダールを含む6人はまずエクアドルへ赴き、いかだ船に適切なバルサ木材を切り出し、その後ペルーにてバルサ材を使っていかだ船を組み上げました。ヘイエルダールの私的な繋がりを通してアメリカ軍代表から寝袋、食料品、日焼け止め、缶詰等、日用品から航海における必需品の計量器や無線機器まで貰い受けることが出来たのです。また、遠征の書記担当としてアメリカ、ワシントン市にあるノルウェー大使館所属のゲルド・ヴォル女史を任命し、彼女がいかだ船と地上の情報の架け橋の役目を果たしました。

バルサ材のいかだ船、コンティキ号の乗組員はヘイエルダールの他、ヘルマン・ワッツィンゲル氏、エリック・ヘッセルベルグ氏、クヌート・ハウブランド氏、トルステイン・ロビー氏、ベンクト・ダニエルソン氏です。航海に必要なスキルを持っていること、そして勇敢であることを乗組員の選任条件としてヘイエルダール自身が選びました。

ワッツィンゲル氏はニューヨーク市で偶然ヘイエルダールと出会い、乗組員の中では副船長の任務を果たしました。彼は冷凍技術、水文学や熱力学におけるエンジニアであり、冷凍技術を開発するために米国に滞在していました。ワッツィンゲル氏からの遠征に参加したい旨をヘイエルダールはすぐに受け入れ、乗組員に決まりました。

エリック・ヘッセルベルグ氏はヘイエルダールの幼馴染で、彼にとっての親友でした。乗組員の中では航海士の役割を果たしました。彼は5年間の商船航海実績があり、コンティキ号では唯一航海経験がある乗組員でした。彼は芸術の勉強もしており、いかだの帆にコン・ティキ・ウィラコチャ神の顔を描きました。

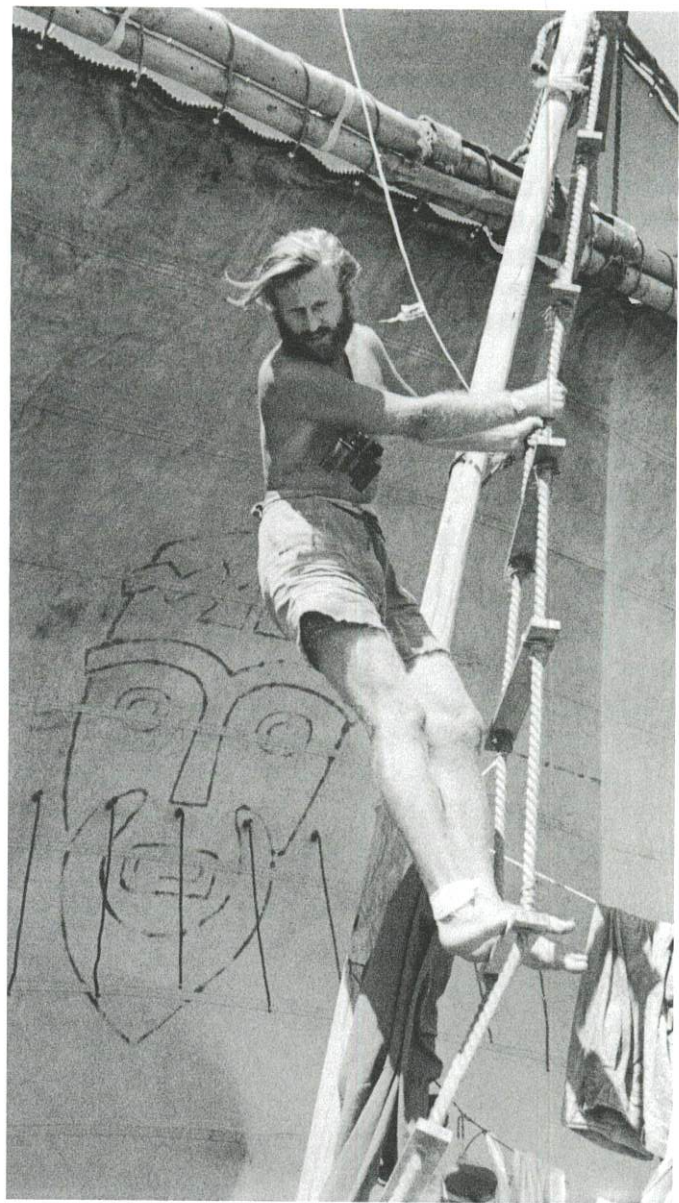




クヌート・ハウグランド氏は第二次世界大戦中、1943年にリューカンでのノルスク・ハイドロ重水工場破壊工作に無線オペレーターとして参加しており、戦争中の劇的な経験を通して勇気と機知を存分に発揮した乗組員の一員でした。

トルステイン・ロビー氏もハウグランド氏に他に負けないほど優秀な人員でした。無線ラジオのエキスパートであり、戦争中は敵陣背後で極めて困難な条件の中フィンマルク高原に何ヶ月も潜み、ドイツ隊員の無線アンテナの盗聴に成功し、ドイツの戦艦ティルピッツに関する多くの情報を取得した強者でした。

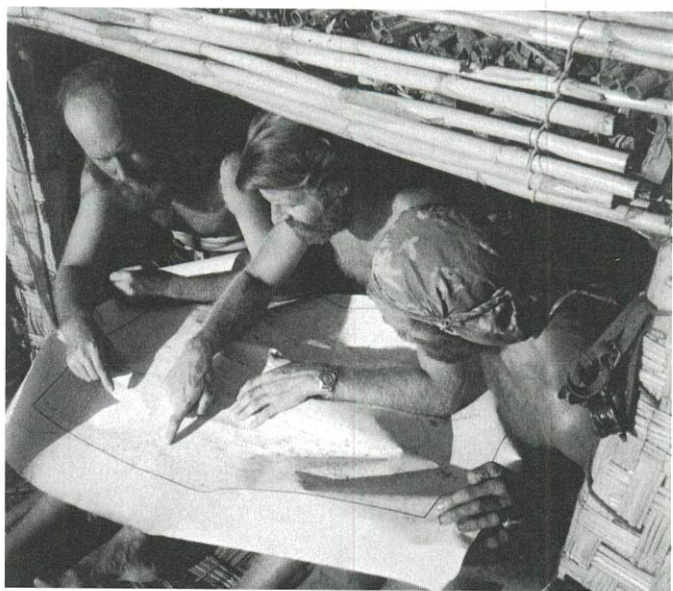
ベングト・ダニエルソン氏はウプサラ大学に所属する人類学者でした。ハイエルダールの学説に興味を持ち、遠征の準備段階で参加の意志を表明し、一番最後に乗組員の一員となりました。乗組員の中で唯一スペイン語を話すことが出来ました。



乗組員の中で唯一ヘッセルベルグ氏は航海の経験がりましたが、誰ひとりとして帆走の経験者はおらず、更にいかだ船の操縦については完全に手探り状態でした。こういった知恵はすでに数百年前に忘れられてしまっていたためです。ヘイエルダールはいかだの操縦方法も遠征中に試行錯誤を繰り返して得ることが出来るだろうと信じ、最終的にはフンボルト海流と東風がコンティキ号を間違いなく西の南洋諸島に導いてくれると確信していました。人類学者の専門家たちはいかだが目的地に無事到着する確率は低いものだと考えていました。バルサ材で出来たいかだ船ではせいぜい2週間ほどしか持たないだろうと予測し、この遠征自体がもはや自殺行為だと忠告した人々も少なくはありませんでした。

しかし彼らは間違っていました。航海14日目が過ぎ、ヘイエルダールと乗組員はいかだ船が長期の航海に適していることを確信しました。ヘイエルダールの遠征日記には「いかだ」というものがどれほど海に最適な乗り物であるかが書かれています。航海101日目にコンティキ号はフランス領ポリネシアのラロイア環礁のサンゴ礁に座礁し、この遠征は成功に終わりました。ヘイエルダールとコンティキ号の乗組員は南アメリカの先住民族がバルサ材のいかだ船を使って太平洋を西に横断出来たことを世界に証明したわけです。

遠征の1年後、1948年にはヘイエルダールの著書「コンティキ号漂流記」が出版されました。この本は70ヶ国語以上に翻訳され(邦訳は1951年)売上数は数千万冊に及びノルウェー人著者の本の中では最大売上を記録しています。1950年には乗組員が撮った遠征記録画像を元にして作ったドキュメンタリー映画「Kon-Tiki」が作成され、1951年のアカデミー賞長編ドキュメンタリー映画賞を受賞しました。





ガラパゴス諸島 (1953年)

1953年、トール・ヘイエルダールはガラパゴス諸島への探検・調査計画を立てました。調査隊には2人のノルウェー人考古学者エリック・K・リード氏そしてアルネ・ショルズヴォル氏も共に参加しました。ガラパゴス諸島での考古学調査はこれが初めてでした。この調査は主に南アメリカの民族がコロンブス以前の時代にガラパゴス諸島に来ていたことを証明するのが目的でした。調査では古代インカの笛や130器以上の陶器の破片が発掘され、後に古代インカ文明前のものだと判明しました。これによって南アメリカの民族はガラパゴス諸島に来ていたことが明らかになりました。

更にガラパゴス諸島には雨季以外に飲料水がないため定住者は居なかったことが調査隊によって判明しました。探検終了後、同調査隊はインカ文明の航海器具「グアラ」(センターボード)を使った帆走実験を執り行い、その結果、古代インカには船の操縦技術があり、風に向かって帆走することも出来たことが分かりました。トールにとってこれは画期的な発見でした。コロンブス以前の南アメリカの先住民族が太平洋を航海し、更に帰ることまで出来た可能性が明らかになったからです。

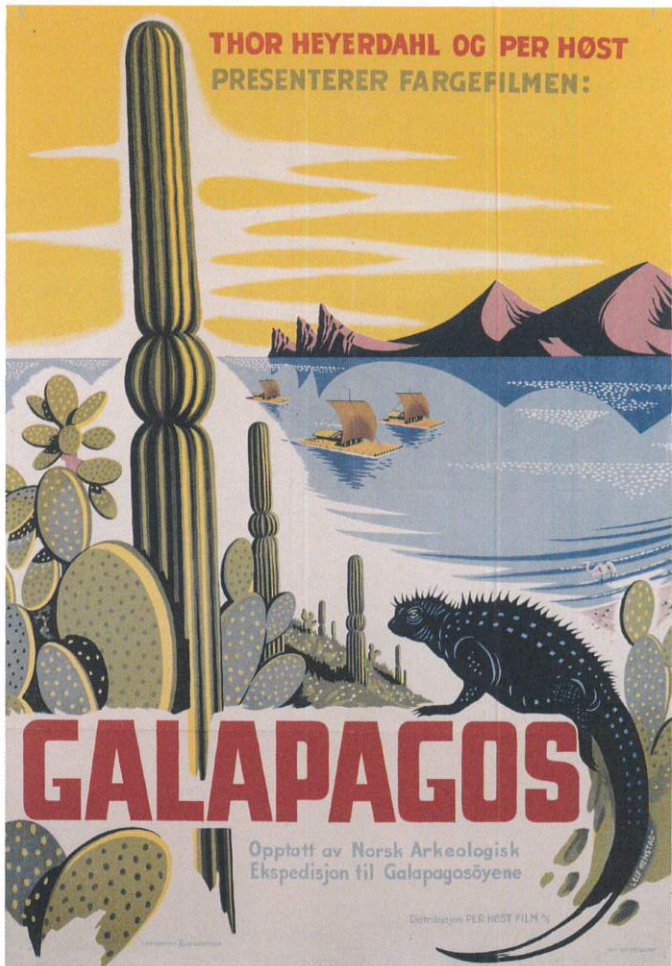
1955年には動物学者兼映画家のパール・フスト氏の協力を得て、ガラパゴス諸島探検のドキュメンタリー映画を完成させました。映画に使われている音楽はスネ・ワルディマー氏が作曲しました。



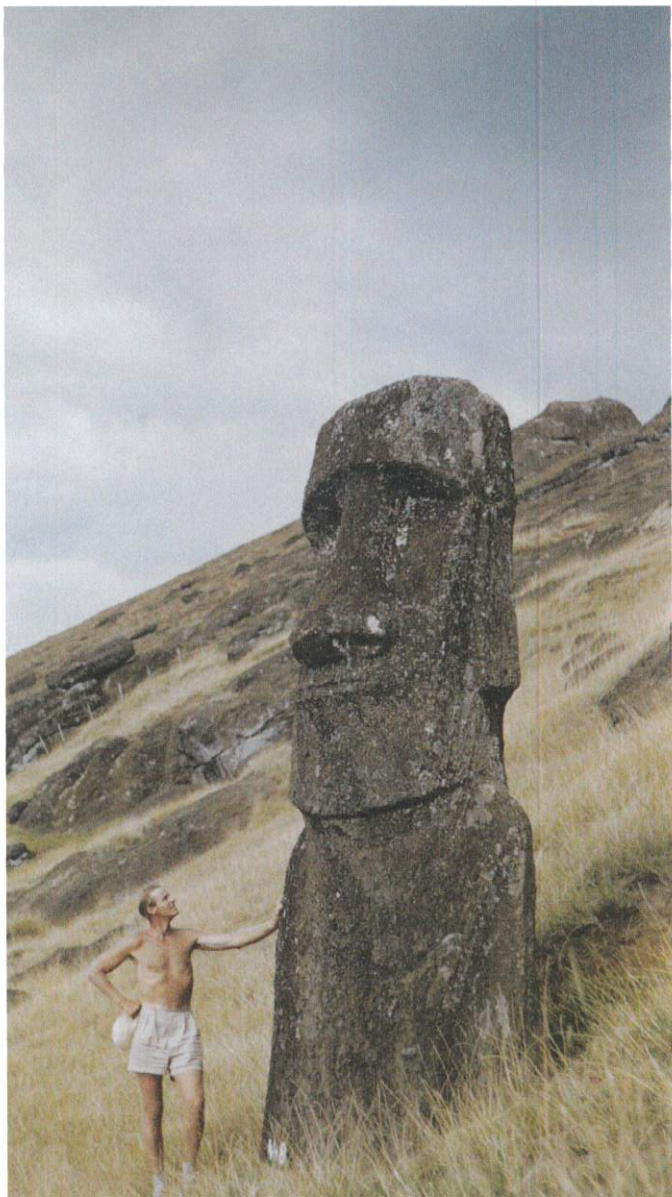


調査隊員ら。前方向かって左からエリック・
リード氏、トール・ヘイエルダール、アルネ・
シヨルズヴォル氏。後方向かって左からカール・
アンゲルマイアー氏、アーリン・グラッファー氏。

THOR HEYERDAHL OG PER HØST
PRESENTERER FARGEFILMEN:



調査の2年後に上映された映画「ガラパゴス」のポスター
(1955年)



モアイ像の隣に立つトール・ヘイエルダール
(1955-1956年)

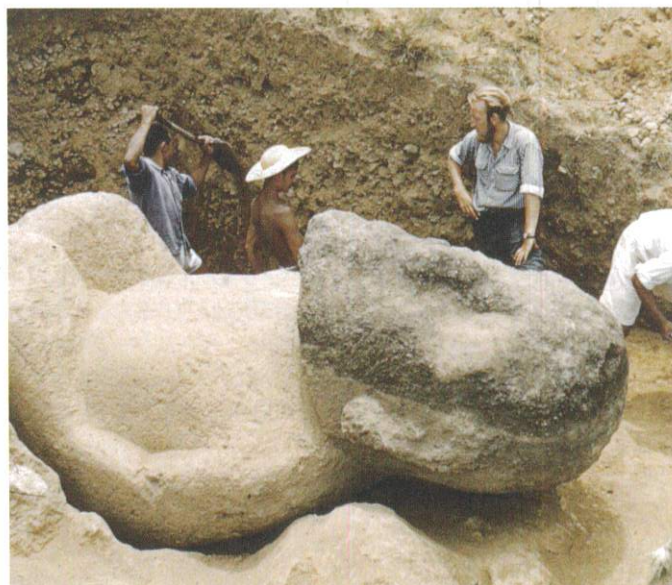
イースター島 (1955-1956年、 1986-1988年)

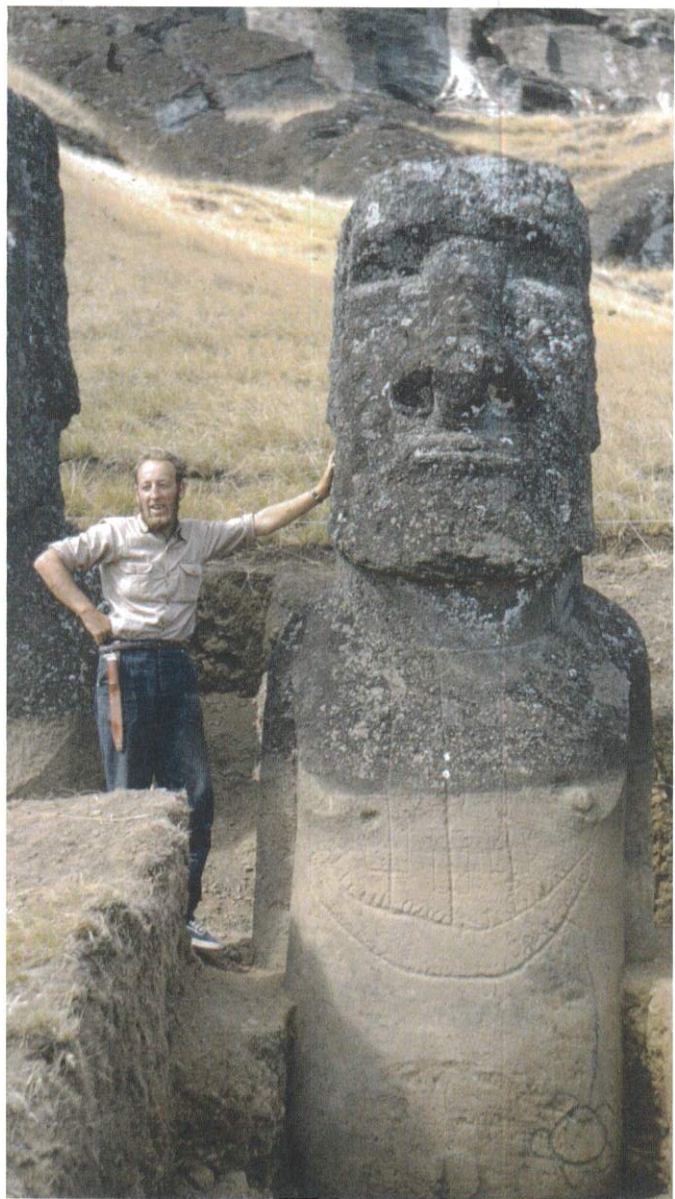
1955年トール・ヘイエルダールはイースター島探検旅行に出向き、調査隊員として5人の考古学者が参加しました。アルネ・ショルズヴォル氏（ノルウェー）、ゴンザロ・フィゲロア氏（チリ）、エドウィン・N・ファルドン氏、ウィリアム・T・ムロイ氏、カーライル・S・スミス氏（アメリカ）の以上5名です。

イースター島の開放的な海岸には巨大な石の像（現地語では「モアイ」）が数多く点在しています。古代のラノ・ララク採石場では頭のみが沢山削り出されていると昔から信じられていましたが、ヘイエルダールの調査隊の発掘作業を通して、地上に見えている頭は「流氷の頂点」のみであり、残りの体は地下に存在していることが判明したのです。

また、調査員は島の幾つかの洞窟を現地人に紹介され探索しました。中に数多くの古い小さな彫刻が並んでおり、現地人によると世代を超えて受け継がれてきた聖なる像だといいます。このような彫刻の存在はこれまで世界には全く知られていませんでした。ヘイエルダールはその際、数百体の彫刻を買収しました。

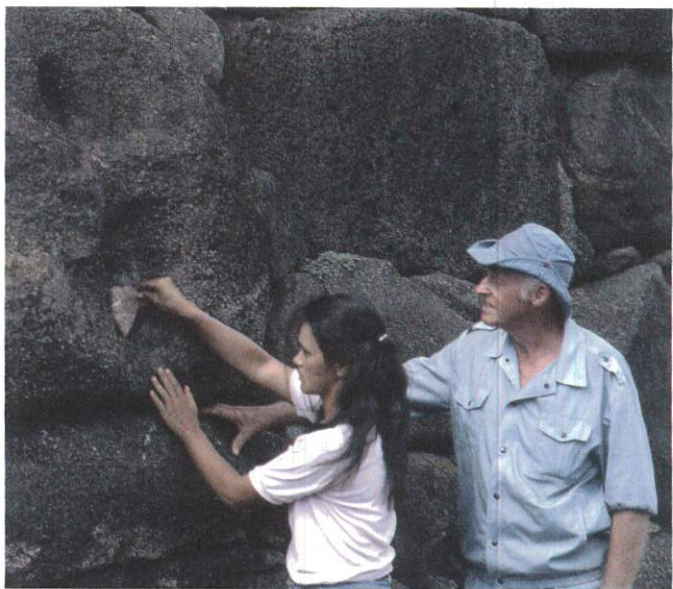
1957年には探検記を本にまとめた「アク・アク（孤島イースター島の地下の世界）」を出版しました。（邦訳は1958年）「コンティキ号漂流記」と同様に人気を博しました。イースター島の発掘作業を正確に記録するためにカメラマンのアーリン・J.シャルヴェン氏が調査員に同行しており、この記録画像を元にして1960年には映画「Aku-Aku」が制作されました。





1986年、ヘイエルダールは再びイースター島に出向きました。この2度目の探検旅行では島に残る伝説の「歩くモアイ」を再現し、巨大な石の像を動かしたことが有名です。

チェコ人のエンジニア、パヴェル・パヴェル氏の知恵を借り、現地人16人の力で直立した状態のモアイ像を動かすことに挑戦したヘイエルダール。紐は頭と体の下の部分に結び付けられ、驚くほど簡単に15トンの巨像を垂直状態で動かすことに成功し、「歩く」モアイは伝説のみの話ではなかったこと、そして島の中でどの様にモアイ像が動かされていたのかを知ることが出来たのです。



ラー号 (1969年)、 ラーII号 (1970年)

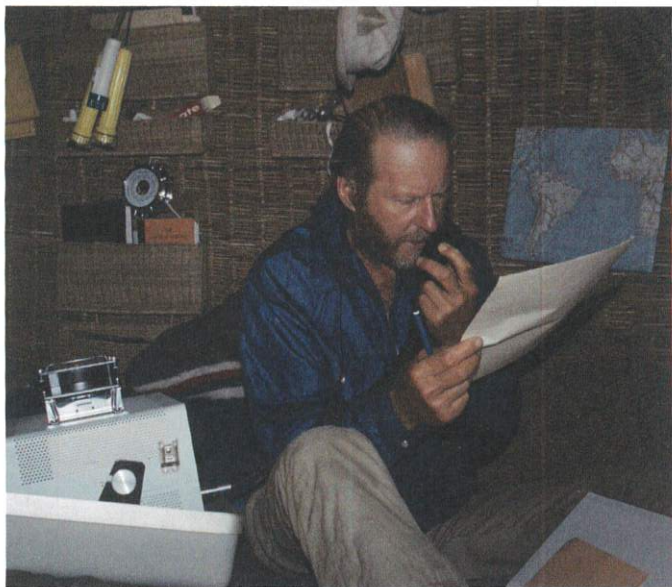
最初のイースター島への探検でトール・ヘイエルダールはマストと帆がついている古代の葦船の絵を発見しました。これを元にヘイエルダールは古代文明時代に葦船を使い大西洋をまたいで人々が交流していた可能性が有るということを証明したいと思い始めました。

エジプトの太陽神の名前をつけた葦船「ラー号」は1969年にクフ王のピラミッドのふもとで建設され、モロッコ海岸のサフィ市に運ばれました。

今回の乗組員は一人ひとり出身国の違う7人。これを通してバックグラウンドが違う者同士が過酷な状況の中でも互いに助け合い、困難を乗り越えていくことが出来ることを見せたかったのです。乗組員はヘイエルダールに加えてノルマン・ベーカー氏、カルロ・マウリ氏、ユリ・センケヴィッチ氏、サンチアゴ・ゲノヴェス氏、アブダラ・ジブリン氏、そしてジョルジェス・ソリアル氏でした。

葦船ラー号は建設不備と舵の損失があったにも関わらず、8週間の遠征で5,000キロの航海を達成しました。葦は次第に水に浸り、乗組員を乗せたまま船が海に沈んでしまうことを恐れたヘイエルダールはその時点でやむなく遠征を中断しました。残り1週間ほどでバルバドスの目的地に到達するところでした。





10ヶ月後、ラーII号がラー号と同じモロッコの海岸線の町の海に投じられました。新しい葦船の建設は南アメリカの先住民でチチカカ湖周辺に住む4名のアマヤ族から助けを得て作り上げました。アンデス山脈の湖畔では現代でも古代メソポタミアとエジプトで使われた葦船に似た造船方法で船が建設されていたためです。

この遠征に再び挑みたいという共通の思いを胸にラー号の乗組員たちの多くはラーII号の遠征に加わりました。乗組員はヘイエルダール、そしてノルマン・ベーカー氏（アメリカ）、カルロ・マウリ氏（イタリア）、ユリ・センケヴィッチ氏（旧ソビエト連邦）、サンチアゴ・ゲノヴェス氏（メキシコ）、そして新しく加わった小原啓氏（日本）とマダニ・アイ・オハンニ氏（モロッコ）でした。

この新しい葦船、ラーII号は前回の船よりも全長が短く、より頑丈に建設されており、モロッコからバルバドスの目的地までの約6,100キロの航海を57日間で終えました。2回目の挑戦が成功したことから、世界中の人類学における、コロンブス以前の古代の地中海文明と中米・南米の文明は交流がなかった、という従来の定説を覆す結果となりました。

ラー号の遠征中、乗組員たちは大西洋の汚染を目の当たりにしました。海面に油の塊が浮いていたのです。この発見内容は国際連合（以下国連）に報告され、ラーII号の遠征では国連事務総長からの申し入れで、海水の汚染調査を行いました。調査の結果、57日間の遠征のうち、43日間は海面に油の塊が浮いていることが確認されました。

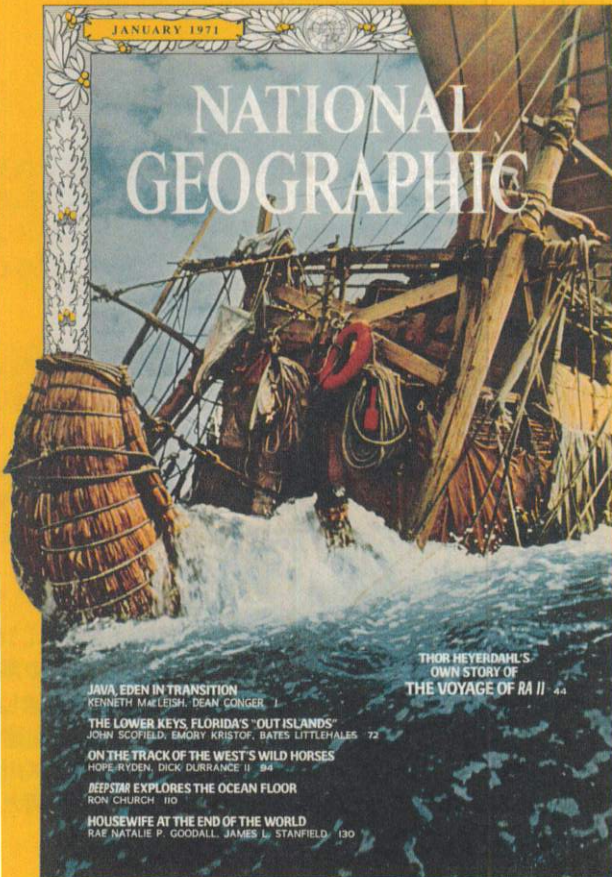
ヘイエルダールは海水汚染問題の報告を1972年にストックホルムで行われた第1回国際連合人間環境会議に提出し、外洋での廃油投棄の禁止例の施行に至りました。

遠征終了後、ヘイエルダールはラー号の遠征記を出版し、作成されたドキュメンタリー映画はオスカー賞にノミネートされました。



JANUARY 1971

NATIONAL GEOGRAPHIC



THOR HEYERDAHL'S
OWN STORY OF
THE VOYAGE OF RA II 44

JAVA, EDEN IN TRANSITION
KENNETH MACLEISH, DEAN CONGER 1

THE LOWER KEYS, FLORIDA'S "OUT ISLANDS"
JOHN SCOFIELD, EMORY KRISTOF, BATES LITTLEHALES 72

ON THE TRACK OF THE WEST'S WILD HORSES
HOPE RYDEN, DICK DURRANCE II 94

DEEPSTAR EXPLORES THE OCEAN FLOOR
RON CHURCH 110

HOUSEWIFE AT THE END OF THE WORLD
RAE NATALIE P. GOODALL, JAMES L. STANFIELD 130

OFFICIAL JOURNAL OF THE NATIONAL GEOGRAPHIC SOCIETY WASHINGTON, D.C.

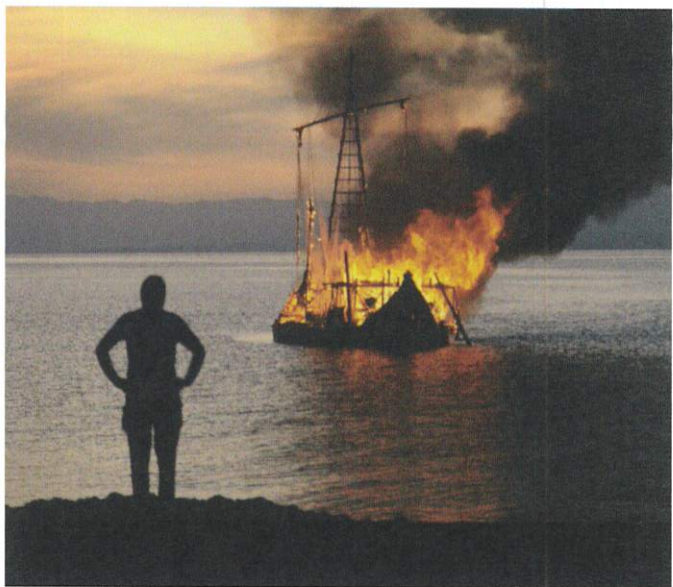
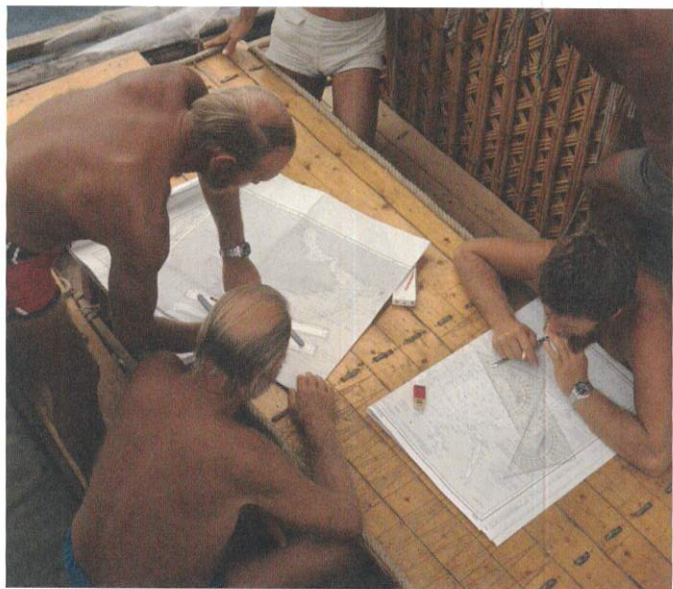
ティグリス (1978-1979年)

古代エジプトの芸術品には葦船と船員のモチーフが多く使われています。1968年、ハイエルダールはエジプト、ルクソールの王家の谷の墓内に描かれている絵を目にし、1970年代には古代メソポタミア文明、インダス文明とエジプト文明は海を使って交流していたのではないかとの考えを抱くようになりました。

メソポタミア文明のシュメール人が帆の付いている船を使っていたことは科学者たちにとっても明らかなものとなっていましたが、それは主に川と海岸線沿いにのみ用いられていたと考えられていました。ハイエルダールはそれに納得ができず、古代の簡単な船でも大海をまたぐことは出来たはずだと信じ、海は文明交流の妨げではなく、実は交流の大通りではなかったのかと問いかけるようになりました。

1976年、ハイエルダールはイラク（古代メソポタミア）を訪れ、シュメール人の葦船を調査しました。そこでハイエルダールは葦の浮き具合は葦が8月に収穫された時に頂点を達することを学びました。シュメール人の勧めに従って、1977年には最大級の葦船建設に取り掛かりました。船の全長は18メートル、ユーフラテス川とティグリス川が合流する地点で水に投じられ、ティグリス号と名付けられました。





様々な国から、11人の乗組員が集められました。そのうち3人はラー号の遠征にも参加したノルマン・ベーカー氏（アメリカ）、カルロ・マウリ氏（イタリア）、ユリ・センケヴィッチ氏（旧ソビエト連邦）、そして新たに加わったラシャード・ナジル・サリム氏（エジプト）、アスビョン・ダンフス氏（デンマーク）、ハンズ・ペッテル・ブーン氏（ノルウェー）、カラスコ・ゲルマン氏（メキシコ）、ノリス・ブロック氏（アメリカ）、デトレフ・ソイゼク氏（ドイツ）と日本からこの航海に加わった鈴木公氏でした。

シャットウルアラブ川を下流しアラビア湾を経てアラビア海へとティグリス号は進みました。今回の遠征はコンティキ号やラー号とはまた異なり、海流や風に沿らずに目的地の各地の港にを目指して航海帆走しました。操縦性が低い船ではあったもののパキスタンのインダス溪谷、そして続いて東アフリカのジブチに到着。続けて紅海に進むことを予定していましたが地域の紛争や乗組員の疲弊状態を鑑みて、遠征はジブチで幕を閉じることとなったのです。

今回の遠征は6,800キロ、143日間でした。この遠征を通して葦船による海の帆走が可能だという事を証明しました。ヘイエルダールの他、専門家達もやはり古代文明はアラビア半島付近の海を通して交流していた可能性が高いと考えるようになりました。

当該地域における荒れ狂う地域紛争への抗議の表しとして、ヘイエルダールはティグリス号を海で燃やすことにしました。そして1978年4月3日、ジブチの海でティグリス号は炎に飲まれ、同時に以下の文章を先進国の住民に向けて国連に書簡として送ったのでした。

「私たち自身が選んだ自国のリーダーたちに対し、先祖代々如何なる剣や斧をも拒絶してきた民たちへ現代兵器の供給を直ちに止めるように要求しない限り、これらの責任は私たち1人ひとりにあるのだ。」



モルディブ (1983-1984年)

1982年秋のある日のこと、ヘイエルダールに郵便物が届きました。その中にはインド洋、モルディブで発見された正体不明の石像の写真が入っていました。その写真に写っている石像を作ったのが誰であったのかを調べるべく、ヘイエルダールは考古学調査を開始しました。

当時モルディブには1922年以降、考古学者は誰1人として足を運んでいなかったのです。1983年とその翌年、ヘイエルダールは発掘調査を執り行いました。調査隊員は考古学者であり古くからの友人であるアルネ・ショルズヴォル氏を筆頭に、まだ年若い考古学者たち、オイスタイン・コック・ヨハンセン氏とエーギル・ミッケルセン氏も参加しました。この2人はその後、数回に渡ってヘイエルダールと協働することになります。

モルディブで調査した大半の島には中心部に人為的に作られた山があり、そこには丁寧に削り出された石やサンゴで作られた小さな神殿が幾つか存在していました。西暦550年に建てられた古いものもありました。

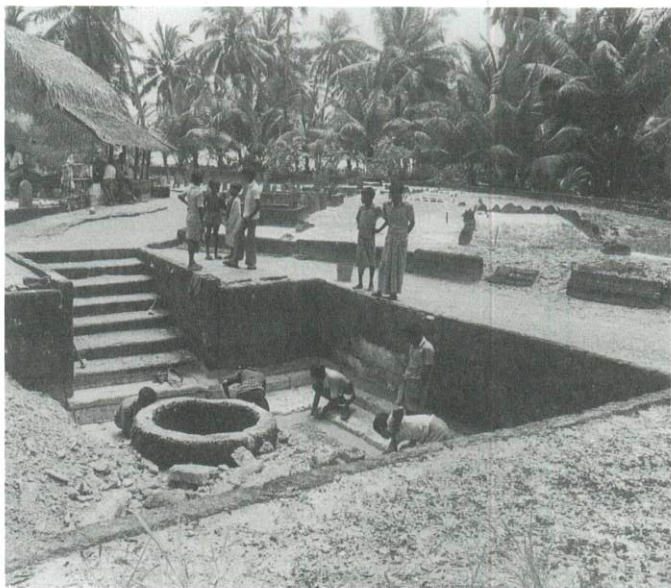
神殿の周辺には石で削り出された小さなプールがあり、儀式の為に作られたと思われる石の階段がプールの底まで続いていました。その他、幾つもの石像や仏像、神殿の飾りに使われた小さな仏塔も発掘されました。そして文字やシンボルが削り込まれている石版も見つかりました。仏塔は頭頂が丸く削られているものもあり、ヘイエルダールはこれは男根のシンボルであろうと解釈しました。

この発掘結果からモルディブには西暦550年頃には人が移住してきたと解釈出来ます。おそらくスリランカの仏教徒たちが島に移り住み山や神殿、儀式用のプールなどを建設したのでしょう。

加えてヘイエルダールはインダス文明に影響を受けた太陽崇拝者がインド、スリランカを経てモルディブに達した可能性を示しました。しかしこの説は他の研究者たちに否定されてしまいます。ヘイエルダールを率いる調査隊は研究者たちを説得できるほどの証拠を見つけることはできなかったものの、紀元前90年のローマ帝国製のコインを発掘しました。ローマ帝国時代の書物にもモルディブについて書かれており、古代人がモルディブの存在を知っており、訪れていたことも明らかになっています。

モルディブでは貝貨として使われていたタカラガイの流通が古代から行われていました。タカラガイは北ノルウェーの鉄器時代の墓の中で発見されています。モルディブは古代の商船停留所の役割を果たし、商売のネットワークはアジア、そしてヨーロッパにも至っていたことがわかります。

このモルディブの調査は、これらの島々に対する考古学的関心を助長し、この調査の後、モルディブではエーギル・ミッケルセン氏などによる考古学的発掘作業が何度も行われました。





トゥクメ (1988-1992年)

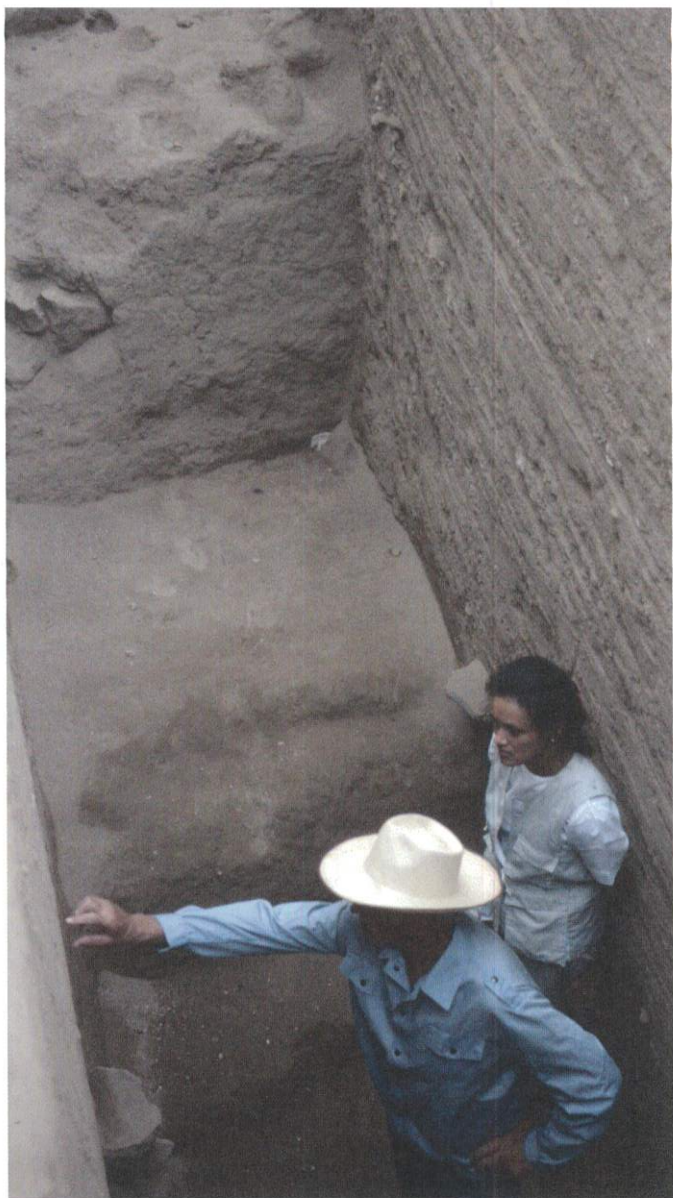
1988年から1992年にかけて、ヘイエルダールはペルーのトゥクメ近辺の「ラ・ラヤ」と呼ばれるピラミッド集団の発掘作業を指揮しました。「アドビ」と呼ばれる日干し粘土のブロックを使い作られた26基のピラミッド式の建設物が集まっている場所です。

この発掘現場はこの当時世界で最大規模のプロジェクトでした。発掘を通してトゥクメの遺跡は西暦1100年頃に建設されたものであるとの結果に達しました。1992年3月に見つかった、この調査における大発見は刻まれた絵がはっきり残っている神殿の壁でした。絵はミステリアスな鳥人間が2隻の船に乗っているというもので、船の下には波と何人もの鳥人間がそれぞれ丸い物体を持っている姿が描かれていました。

4日後、考古学者のアルネ・ショルズヴォル氏 にこの壁を見せたところ彼は迷いもなく「こ、これ！トール、これはイースター島で見た、あの卵を手にとって座っている鳥人間そのものだよ。」と言いました。

他にも素晴らしい発掘物が数多く発見されましたが、その中にはイースター島に昔から受け継がれている物と同様の儀式用のダブルブレードパドルなどがありました。ヘイエルダールにとって神殿の壁やパドルの発見は、神話にみちたイースター島に初めて到達した民族は南アメリカの先住民族であったことの新しい確証となりました。

ヘイエルダールはこの発掘を機に東ポリネシアの島々を初めに発見したのが誰であったかを探る研究調査を終えました。それはトゥクメの発見で明らかになった航海文化の証拠によってヘイエルダールの学説が完全に立証されたためです。他の研究者はポリネシアを初めに発見したのは西から来た民族だと主張していますが、西暦1300年前後にはポリネシアと南アメリカの住民たちは交流していたであろうと考えるようになりました。この交流が南アメリカ種のサツマイモがポリネシアに見られること、南アメリカ先住民のDNAがポリネシア人に受け継がれていることの説明になるわけです。



世界市民として

人間は皆同じだ。皆同様に現実的な問題を抱えている。これがヘイエルダールの人の命に対する信条でした。そして、民族、政治、宗教の分け隔てなく、人類は皆共働、共存していくことが出来ると信じていました。

1950年代後期から1990年代初頭まで、ヘイエルダールは世界的な平和運動に力を注ぎました。直接各国の高等当局やアンドレイ・グロムイコ、ジョン・F・ケネディーなどの影響力のある政治家に語りかけ、説得しました。

ヘイエルダールの価値観に基づいた発言は世界連邦運動に取り上げられ、瞬間間に彼は積極的に運動へ参加する一員となりました。世界連邦運動とは世界平和を目的に国境を超えた協力と国際法律、国際刑事裁判などを推進する運動です。のちにヘイエルダールは名誉副会長に任命されました。

そのほかにもヘイエルダールはユナイテッド・ワールド・カレッジの働きにも加わりました。世界中で非営利の高等学校を運営している団体で、世界中から集められた青年たちが共に暮らし、勉強しています。この団体は冷戦中に設立され、出身地や文化が全く違う青年達が互いに学び合い、協力し合う環境を作りあげることが目標としています。

国際色豊かな乗組員を乗せて敢行されたラー号、ラーII号 そしてティグリス号の遠征を通してヘイエルダールは文化の違いを超えて協力し合うことが可能だということを示したかったのです。その信条はまさに古代から人類は海を使って活発に交流していたというヘイエルダールの仮説からなるものです。

1978年のティグリス号遠征ではイラクからジブチ、そして紅海へと旅を続ける予定でしたが、地域の荒れ狂う紛争に妨げられ続行を断念しました。抗議としてティグリス号は海で燃やされ、同時に国際連合の当時の事務総長クルト・ヴァルトハイムに戦争抗議と先進国の発展途上国への武器貿易の問題を取り上げた文書を書き送りました。これには乗組員全員が署名に名を連ねました。

「我々は葦束の船で海を渡ってきたが、地球がこの船のように沈没船と化すリスクは大きく、我々現代人が目と心を開き互いに積極的に協力しあっていかなければ、私たちの文明と惑星はこの葦船と同じ結末を迎えることとなるであろう。」

1

ATLANTIC OCEAN POLLUTION OBSERVED BY THE RA EXPEDITION.

Report and samples delivered to the Norwegian Delegation at the United Nations.

^{North Atlantic} by Thor Heyerdahl

The ^{North Atlantic} surface current moving constantly from Northwest Africa to tropic America is polluted by a ~~continuous~~ continuity of drifting oil clots. This is the essence of ^{below range} ~~these~~ observations made ^{at sea level above} ~~the~~ the papyrus vessels Ra I and Ra II during two consecutive ~~two~~ voyages in 1969 and 1970.

I'm organizing an marine experiment with the first papyrus boat ^{to be} ~~used~~ tested at sea in ~~these~~ ^{such} ~~times~~ ^{expedition group was initiated} ~~times~~, ^{and} ~~was~~ ^{unprepared} ~~was~~ ^{for} ~~pollution~~ ^{studies} ~~studies~~. The objectives of the enterprise were to investigate the seagoing qualities and possible range of a papyrus raft-ship and to test multi-national cooperation under stress. However, early in the voyage of Ra I pollution observations were forced upon all expedition members due to its grave nature and ^{because of} ~~our~~ ^{own} ~~own~~ proximity to the ocean surface coupled with our slow progress through the water. At an average speed of ^{approximately} ~~2 and~~ 2.5 knots, and rarely exceeding 3 knots, we covered ^{with Ra I} 2,700 nautical miles (ca. 5,000 km.) ~~with Ra I~~ from May 25 to July 18, 1969, and ^{with Ra II} 3,270 nautical miles (ca. 6,100 km.) ~~with Ra II~~ from May 17 to July 12, ~~in~~ 1970.

The brief report accompanied ~~the~~ ~~report~~ by a

環境保護活動家として

ラー号の遠征中、ヘイエルダールは大西洋における海洋汚染を発見しました。海面に油の塊が浮いていることに乗組員らは気づき、発見内容は国連に報告されました。ラーII号の遠征では国連の事務総長からの申し入れで、連日海水の汚染調査を行いました。結果、57日間の遠征のうち、43日間は海水に油の塊が観測されました。

遠征隊員は嘆願書を書き上げ、国連の事務総長ウ・タントに提出しました。油による国際的な海洋汚染問題は特にアメリカのメディアで注目され、ヘイエルダールは聴聞のため米国議会に招待されました。また、1972年のストックホルムにおける第1回国際連合人間環境会議の準備会議にノルウェー外務省代表の1人として参加しました。ストックホルムでの会議では海への廃油の投棄禁止令等が採択されました。沈みかけた葦船ラー号隊員の呼びかけは直接的な実績を残したわけです。

その後もヘイエルダールは環境保護活動を続け、海洋汚染問題を取り上げては世界一面に広がる海原を「世界洋」と記載し、世界は海を通して繋がっていることを強調しました。

芸術家として

ハイエルダールの芸術家としての一面はあまり知られていません。ハイエルダールの著書、映画や絵画の作品は彼の最たる情熱、古代人類学や考古学に関する内容のものがほとんどです。

ハイエルダールは少年時代から絵をたくさん描いていました。新聞や雑誌に記載された青年時代のハイエルダールの冒険記などには彼が描いたユーモアあふれる絵や図が付属されています。また、1937-1938年に結婚したばかりの妻を連れて訪れた太平洋の冒険中は、その経験を元に幾つもの風刺漫画調の作品を描き上げました。その後、コン・ティキ遠征前の作品は社会批判のテーマが多く、他民族への偏見、発展を盲目に支持する社会、世界資源の不公平な分配政治等を取り上げました。作品の多くにはハイエルダールの解説や説明が書かれていました。

木造彫刻はハイエルダールにとって、その一生を通じての大きな関心の1つでした。青年時代の頃から彫刻の才能を発揮しており、当時作った箱の蓋に刻まれた美しい南の島のタブローは今でも保存されています。

ペルーのトゥクメにあったハイエルダールの家、「カサ・コン・ティキ」の入り口に付けられた頑丈な戸にはコン・ティキ神の顔が二つ彫られています。これは晩年のハイエルダールの作品です。

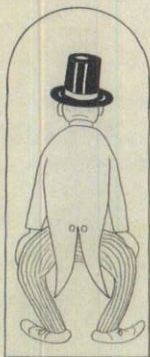
MAN
AND
MONKEY



ALL MEN GOT A HEAD
AND ONE MAN GOT A
HAT. THEN ALL MEN
GOT A HAT TO MAKE
USE OF ALL THEIR HEADS.
THE BRILLIANCE OF THEIR
HEADS SANK RIGHT INTO
THEIR
SHOES.

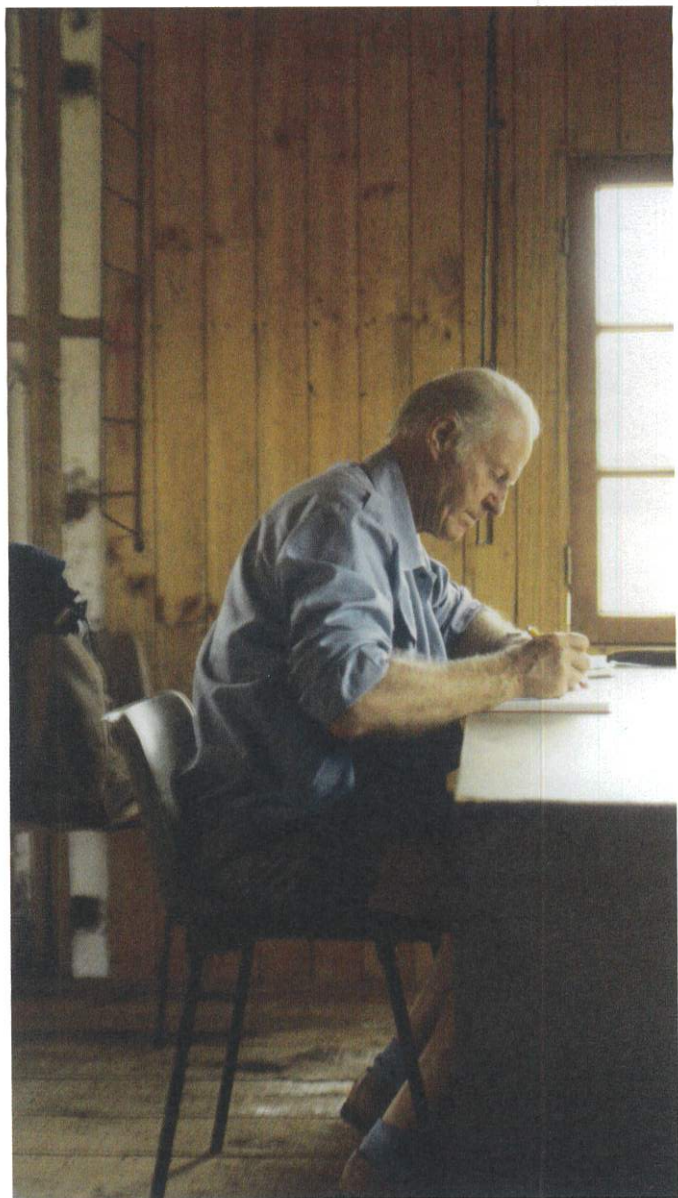


ONE MAN LOST HIS HEAD
AND BEGAN TO TIE IT ON.
THEN ALL THE OTHERS LOST
THEIR HEADS AND STARTED
TIE THEM ON!



ALL THE MONKEYS GOT A TAIL,
BUT EARLY MAN HAD NONE.
IN A MODERN PARTY ANY MALE
CAN HAVE HIS TAILS PUT ON.

78-46



語り継ぐ者として

ハイエルダールは人生の多くの時間を書斎の机の前で過ごしたと言われています。それは本を執筆したり、新発見を求めて世界中の図書館に足を運んだりしていたためです。また、一生を通じて何冊もの本や50本以上の科学記事を出版しています。科学界における「当たり前」に挑む理論を説いたり、予想外の質問を問いかけることを通して科学界の総意を覆すことに長けていました。必ずしも全てが正しかったわけではありませんが、問いかけなしには科学は存在しません。ハイエルダールが問いかけた分野では今でも調査が続けられています。

ハイエルダールのストーリーテラーとしての一面は多くの人々の記憶に残っています。人々を巻き込み、会話を広げ、一種の社会現象を巻き起こしていくのは彼の天賦の才であったとも言えるでしょう。彼は自らの経験を人々に伝えることに燃え、著書や関連映画、写真や講演を通して「伝えるプロ」となっていました。

ハイエルダールは14冊の一般向けの科学書籍を執筆しました。これらの本は多くの人気を得て、様々な言語に翻訳され出版されました。特に1948年出版の「コンティキ号漂流記」は70ヶ国語以上に翻訳され売上数は数千万冊に及んでおり、ノルウェー人著作の書籍における最大の売上を記録しています。

数多くの遠征は映画としても世間に知られていきました。1950年に上映されたドキュメンタリー映画「Kon-Tiki」は翌年のアカデミー賞を受賞しています。映画は注目を浴び、ハイエルダールの科学的なアイディアを一般の人々にも伝える道具となりました。

トール・ハイエルダール

生誕	1914年10月6日 ノルウェー王国、ラルヴィック市
死没	2002年4月18日 イタリア共和国、コラ・ミケーリ村
職業	民族学者、実験考古学者、執筆家
配偶者	リーブ・コケロン・トルブ (1936-1947年) ヨォーン・デデカム-シモンセン (1949-1969年) ジャクリーン・ピール (1991-2002年)
子女	トール・ジュニア、ビョルン (リーブとの息子) アネット、マリアン、ヘレンエリザベス (ヨォーンとの娘)



会員歴

ノルウェー学士院 (Det Norske Videnskaps-Akademi, 1958年)
ニューヨーク学士院 (New York Academy of Science, 1960年) 米国考古
学会 (American Anthropological Association, 1966年) ノルウェー地
理学会名誉会員 (Norsk Geografisk Selskap, 1953年) ペルー地理学
会名誉会員 (Geographical Society of Peru, 1953年) ブラジル地理学
会名誉会員 (Geographical Society of Brazil, 1954) ベルギー王立地
理学会名誉会員 (La Société Royale de Géographie d'Anvers, 1954
年) ソビエト連邦地理学会名誉会員 (USSR Geographical Society, 1964)
ブルガリア地理学会名誉会員 (Mem. Bulgarica Geographica Societas,
1972) エクスプローラーズ・クラブ (Explorers Club, New York, 1942年)
世界自然保護基金 (World Wildlife Foundation) グリーンクロス創立会員、
ワールドビュー国際基金創立会員 (Worldview International Foundation)
世界連邦運動

勲章

オスロ大学名誉博士号 (1961年) モスクワ国立大学名誉博士号 (1989
年) セント・マーチンズ大学名誉博士号 (1991年) パシフィックルター大学名
誉博士号 (1998年) メイン州立大学名誉博士号 (1998年) ラトビア科学ア
カデミー名誉博士号 (1998年) ウェスタン大学名誉博士号 (2011年) ア
ンダース・レッジス・メダル (スウェーデン考古地理学会, 1950年) ヴェガメ
ダル (スウェーデン考古地理学会, 1962年) プリ・ボナパルト-ワイスメダル
(地理学会, パリ, 1951年) ムンゴ・パークメダル (王立スコットランド地理
学会, 1951年) ロモノブメダル (モスクワ国立大学, 1962年) 王立地理学
会パトロンズメダル (1964年) ビュグ・ハーシュタド功労賞 (パシフィックル
ター大学, 1965年) ブラッドフォード・ワッシュバーン賞 (ボストン科学博物
館, 1982年) フリチョフ・ナンセン優秀研究賞 (1985年) オーストリア科
学美術勲章 (2000年) 国際賞 (スペイン地理学会, 1998年) エクスプロ
ラーズ・クラブメダル (1979年) 聖ハルバードメダル (オスロ, 1997年) 聖
オラブ勲章 (1987年) ペルーメリット勲章 (Oficial de la orden Al Mérito
por Servicios Distinguidos, 1952年) メリット勲章、グランドオフィサー
(Grand Officer, Order of Distinguished Merit, 1965年) エジプトメリ
ット勲章、騎士 (Knight of the Order of Merit, 1971年) モロッコグランド
オフィサー・オイッサム・アラオイテ勲章 (Grand Officer of the Order of
Ouissam Alaouite, 1971年) アレコ・コンスタンチノブメダル (1972年)
ゴールデン・アーク勲章、騎士 (Knight of the Golden Ark, 1976
年) 平和大使賞 (国連/食糧農業機関, 1976年) 国際パラヴィ環境賞
(国連, 1978年) ラヒト金花賞 (Golden Blume von Rhydt, 1981年)

© 2017 The Kon-Tiki Museum

ISBN 978-82-92967-14-0 (Japanese edition)

Published by The Kon-Tiki Museum

Japanese edition (published in eleven different languages)

Photographs from the museum's archive

Design: Yokoland

Text typeset in Hiragino Sans and Univers Next Pro

Typeset in Japanese with assistance from So Takahashi

Paper: Munken Lynx 120g, Arctic Paper, Sweden

Printing: Nilz & Otto Grafisk AS, Norway

www.kon-tiki.no

境界線だって？
ぼくは今まで出会ったことも
ないが、一部の人の心の中には
あると聞いたことがあるよ。

ー トール・ヘイエルダール

